時代を写す鏡としての寓話作品『ステファニテスとイクニラテス』
――東方正教会における「奸智」(1)

三　浦　清　美

A Fable “Stephanites and Ikhnilates” as a Mirror Reflecting its Epoch
— “Cunning Cleverness” in the Eastern Orthodox Church

Kiyoharu MIURA

Abstract

In the Russia-Ukraine war that began on February 24, 2022, the Russian army has cunningly been manipulating information, which has been termed “false flag operations.” Based on this, the current paper studies some sources of “cunning cleverness” and their manifestation in the Russian history of religious thoughts in accordance with the acceptance of a fable named “Stephanites and Ikhnilates”. This fable originated in India as “Panchatantra”, was translated into Arabian as “Kalila and Dimna”, came to the Eastern Orthodox world and was translated into Greek as “Stephanites and Ikhnilates”.

“Stephanites and Ikhnilates” is a peculiar product from the Christianity-prevailed medieval era because of its evil fascination where evil characters gain victories over their good-natured opponents. Among the savage Rus’, who accepted Orthodox Christianity from the Byzantine as a complete civilization, a kind of tolerance toward “cunning cleverness,” particularly in the political sense, formed inadequately. This insufficient tolerance toward “cunning cleverness” was caused by the reality that Christianity in itself had been treating “cunning cleverness” with utmost wariness, having taught the Rus’ people of their day to avoid the same. However, in the Byzantine world, such tolerance toward “cunning cleverness” seems to have been steadily cultivated because of classical legacies inherited from Greek-Roman antiquity. The situation of the Rus’ drastically changed in the 14th and the 15th centuries, when the rule of the Muscovy great princedom had been established by means of political “cunning cleverness.”

This paper clarifies the sources of such political “cunning cleverness” by describing political difficulties, which the Eastern Orthodox World, including the Byzantine imperium and Muscovy great princedom, confronted after the devastation of Constantinople by the 4th Crusade. This was when “Stephanites and Ikhnilates” was translated from Greek to Slavic languages and read by a considerable number of people.

はじめに―悪を制御する仕組み

2022 年 2 月 24 日にはじまったロシア・ウクライナ戦争では、ロシア軍がいわゆる偽旗作戦と呼ばれる、「奸智」を駆使した情報操作をおこなっている。本稿は、ロシア・ウクライナ戦争における「奸智」の発現を契機として、ロシア精神史における「奸智」の起源を究明しようと志すものである。その題材として、『ステファ

(1)　本稿は以下の論文を下敷きにしている。三浦清美「時代を映す鏡としての寓話作品『ステファニテスとイクニラテス』―歴史と文学のあいだ」『日本 18 世紀ロシア研究年報』14 号、3-15 頁、2017 年。筆者は、この論文を本文記載の新しい問題意識で再検討し、日本ビザンツ学会（2024 年 3 月 28 日岡山大学）で報告を行った。その報告を論文に仕立て直したものが本稿である。

ニテスとイクネラテス』[2]いう中世ロシアの翻訳寓話を選ぶ。

キリスト教倫理の圧倒的影響下にあった中世ロシア文学において、『ステファニテスとイクネラテス』はその悪の魅力によって異彩を放つ作品だ。インド文学に起源をもち、アラビア語、ギリシア語を通してスラヴ語に訳されたこの作品では、悪徳の主人公たちが人の好いほかの登場人物たちを篭絡して次々に勝利を収めるからである。けっして類型化されない悪が息づくこうした種類の作品が、中世ロシアのどのあたりの時代から姿を現すのか、その社会的な背景は何であったのかという問題に、本稿は一定の回答を与えたい。

ビザンツ世界は、キリスト教の圧倒的な影響下にあったとはいえ、古典古代の伝統の延長線上にあったため、政治の場面でしばしば現れる「狡猾さ」、「奸智」といったものに対する耐性が養われていたと思われる。「奸智」に対する耐性というのは、人間というのはそもそも悪いことをするものだから、その悪にブレーキをかける仕組みを作っておかなくてはならないというある種の知恵である。

ところが、古典古代の伝統がないところでキリスト教を文明として受け入れたルーシの場合、文学は「奸智」に対する耐性をほとんど持っていなかったように思われる。悪にブレーキをかける仕組みを社会のなかに組みこむことがないところでは、「奸智」は発動されると即爆発してしまう。ロシアがビザンツ文明を継承したことは確かだが、悪の発動を制御する仕組みの存在の有無、少なくともその濃淡が、ビザンツとロシアを分ける分岐点となっていると筆者は考える。ビザンツ帝国の滅亡による正教帝国としての自覚の誕生、この自覚に基づいての力によるルーシの統合、モスクワ大公国による中央集権化が、「奸智」爆発のトリガーであった。メルクマールとなるのは、1478 年のヴェリーキイ・ノヴゴロドの併合である。

以下では、『ステファニテスとイクニラテス』がどういう作品であるかを概観したうえで、この作品がビザンツ世界、東スラヴ世界で受け入れられた歴史的背景について考えてゆきたい。

1．旧約聖書のなかの奸智―ダビデ王とウリヤ

旧約聖書は欲望にまみれた人間の生き様が避けることなく描かれることが多いが、なかでも神への忠誠、崇敬の念の深さで知られ、伝統的に『詩篇』の作者であるともされてきたダビデ王の「奸智」は、人間の悪と罪の問題を深く考えさせるものである。

ダビデ王は、あるとき王宮の屋上から、水浴している美しい女性の姿を見て心を奪われ、この女性と関係を結ぶ。この女性は、ダビデ配下の将軍ウリヤの妻、バト・シェバだった。バト・シェバは子を宿した。この不倫を隠すためにダビデは一計を案じた。夫ウリヤはそのとき前線で敵と戦っていたが、バト・シェバの懐妊を知ったダビデは前線から呼びもどした。帰国したウリヤは妻と床を共にし、過ちが隠されるだろうとダビデ王は目論んだのである。しかしこの目論見は外れた。ウリヤは戦友たちを戦場に残したまま家に帰って飲み食いしたり、妻と床を共にしたりできないと言い張り、家に寄りつかなかった。困ったダビデ王はさらに奸智をひねり出した。ウリヤの上官にあてて書状を認め、「ウリヤを激しい戦いの最前線に出し、彼を残して退却し、戦死させよ」と命じた。ウリヤの上官がダビデ王の指示に忠実に従った結果、ウリヤは激戦地で戦死を遂げた。(『サムエル記下』11 章)。

ダビデは欲望に突き動かされて他人の妻を奪い、そのことを隠蔽しようとしたばかりか、隠蔽が難しいとわかると、王としての権力を用いて何の罪もないウリヤを死に追いやっている。ダビデのこの罪は預言者ナタンによって暴かれ、ダビデ王は自らの罪を認める。バト・シェバの宿した子どもは、ダビデ王のこの罪のために、産後まもなく死んでしまう。この悲しみのなかでダビデ王はバト・シェバと床をともにし、生まれてきた子がやがてダビデを継いで王となるソロモンである。ウリヤが生き返ることはなく、そのまま忘却されてしまっている（『サムエル記下』12 章)。

ソロモンの生誕には両親の罪が影を落としていたが、成長して王位についたソロモンは聡明な若者で、主が

---

(2) Стефанит и Ихтнилат *(Подготовка текста, перевод и комментарии О.В. Лихочевой)* // Библиотека литературы Древней Руси. Т.8. СПб., 2003, С.210-273, 552-558;「ステファニテスとイクニラテス」//『世界大百科事典』Ver. 10 日立デジタル平凡社、1988 年。邦訳がある。三浦清美「ステファニテスとイクネラテス」『電気通信大学紀要』29 巻、2016 年。

夢枕に立ち「何事でも願うがよい」と言ったとき、「あなたの民を裁き、善と悪とを判断することができる、聞き分ける心」、すなわち知恵を所望した。この願いをいたく気に入った神ヤーヴェは、ソロモンに富と栄光と長寿を授けた（『列王記上』3 章）。ソロモンは知恵によってイスラエルを統治し、未曽有の繁栄を享受し、エルサレムには神殿が建立されたが、同時にソロモンは 700 人の王妃と 300 人の側室を愛し、妻たちの崇拝する神々を受けいれて偶像を祀るという過ちを犯した。ヤーヴェは激怒し、イスラエルは分裂、栄華の時代は終わった（『列王記上』11 章）。

神への忠誠な態度と敬神の心によって有名なダビデ王、その知恵によって名高いソロモン王のこれら旧約聖書のエピソードが暗に示しているのは、人間の知の働きに対する慎重な留保と言えるのではないだろうか。人間の知の働きが神への懐疑に向かっていくことは珍しいことではない。心理学者 C.G. ユングは、晩年に『ヨブへの答え』という書物を公表し、旧約聖書のなかの神ヤーヴェのイメージに、善のほかに悪の側面も確実にあることを明言したが(3)、ユングにこの『ヨブへの答え』という著書を着想させたのが、聖書の物語のなかで事件の以後にはまったく想起されることのない、不器用で生真面目で正直なウリヤの夢であった。

その夢とは次のようなものである。世の表舞台に出ることなく一牧師として生涯を終えたユングの父が、その夢のなかで現われ、熱をこめて叡智の言葉をしゃべる。ユングは感嘆する。父といる部屋の中央に険しい階段があった。「私の父は『今こそお前を最高の存在へと導くだろう』と言った。（中略）突然、私は―たぶん父親が言ってくれたのだろう―上の扉は個室につながっていて、そこにウリヤが住んでいることが解った。」(4)「中心はアクバル大王の王座である。アクバル大王はインドの大陸を支配し、ダビデと同じく『この世の主』である。しかし、ダビデよりもなお高く、彼の罪のない犠牲者、彼が敵の手に棄て去った彼の忠実な将軍ウリヤが存在している。ウリヤは神によって捨てられた神なる人、キリストの予表のひとつなのだ。『わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか。』その上、ダビデはウリヤの妻を『自分のものにした』のである。」(5)

キリストの予表としてヨブがあり、そのヨブの遠い同胞として、ダビデの「奸智」によって死に追いやられた、不器用で生真面目で正直なウリヤがいる。ユングによって解釈された旧約聖書の認識においては、善と倫理の対極に人間の知の働きがある。ダビデの「奸智」もソロモンの知恵も、罪の大元である高慢を呼び覚ますきっかけと捉えられている。

---

(3) 『ヨブへの答え』でユングが展開したのは、イエス・キリストが到来する必然性について述べた以下の考えである。

ユングは、旧約聖書『ヨブ記』の冒頭箇所で、神ヤーヴェは躁状態といえるほど上機嫌であることに注目する。サタンのまえでヤーヴェは、「おまえは私の僕ヨブに気づいたか。地上に彼ほどの者はいまい。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きている」と自慢する。サタンは皮肉な態度で、「ヨブが、利益もないのに神を敬うでしょうか。ひとつこの辺で、御手を伸ばして彼の財産に触れてごらんなさい。面と向かってあなたを呪うにちがいありません」と誘惑する。その結果、ヤーヴェはヨブを試すというそれだけの理由で、神を畏れ、悪を避けて生きていたヨブを恐ろしい災難に陥れる。

ヤーヴェの軽率さは、荒れ野で悪魔の誘惑をしりぞけるイエスの用心深さと比べると対照的だ。立てつづけにサタンの誘惑に屈するヤーヴェは、その全知全能に反するといわざるを得ない。ユングは、ヨブについて次のように評価する。「打ち倒され、迫害された者が勝利するのは当然である。なぜならヨブはヤーヴェより道徳的に上に立ったからである。ヨブの優位によって今や熟慮や反省を本当に必要とする状況が生まれた。ヤーヴェは人間ヨブより道徳的に優れていることを、それゆえ彼が人間の状態にまで追いつかなければならないことを、間接的に認めているのである。ヤーヴェの被造物が彼を追い越したからこそ、彼は生まれ変わらなければならない。もし彼がその決断をしないなら、それは彼の全知と明らかに矛盾することになろう。」ユング『ヨブへの答え』（林道義訳）みすず書房、1988 年、68 頁。

神が人間に生まれ変わるとは、すなわち、神の子イエス・キリストがこの地上につかわされたことを意味する。ヤーヴェはサタンに 2 度までも誑かされ、その全能を傷つけられたうえ、道徳的な観点からヨブに追い越されたがゆえに、そのビハインドを回復するために人間となり、神の子イエス・キリストとして受難を受けたということになる。ユングはキリストの予表であるヨブについて次のように述べる。「キリストの一生は、神の一生と人間の一生とが同時に生きられるなら、そうなるはずであるという、まさにそのようなものである。それは一つのシンボル、いうなればヨブとヤーヴェが結合して一つの人格になったかのようである。人間になるというヤーヴェの意図はヨブとの確執から生じたものであるが、それがいまキリストの人生の苦悩のなかで成就するのである。」ユング『ヨブへの答え』75 頁。

(4) C・G・ユング『ユング自伝 2』（ヤッフェ編、河合隼雄・藤縄昭・出井淑子訳）みすず書房、1987 年、26 頁。

(5) ユング『ユング自伝 2』27 頁。

2. 中世ロシアにおける善と悪の類型化
—『フェオドーシイ伝』と『ボリスとグレープについての物語』

旧約聖書は、基本的にユダヤ人の歴史というよりもっと普遍的に、人間そのものの行動の歩みについて述べた書であると言える。すでに見た通り、そこでは人間の知の働きに対する懐疑的な態度が優勢であった。すべてのよいものは、人間の思い付きではなく、聖霊の働き（神によって吹きこまれた考え）によって生じるのである。ビザンツから文明を享受した中世ロシアでは、キリスト教倫理の圧倒的な影響のもとに、文学における善と悪の著しい類型化が進んだ。善は「キリストへの真似び」によってもたらされ、悪は悪魔の教唆によって引き起こされるという認識が支配的であった。善の類型化は『フェオドーシイ伝』(6)、悪の類型化は『ボリスとグレープについての物語』(7)において見ておくことにしたい。いずれの作品も 11 世紀に書かれた中世ロシアの典型的な聖者伝で、『ステファニテスとイクニラテス』の対極をなすものと考えられる。

フェオドーシイ（1008 頃 -1074）は、キエフ洞窟修道院の第 2 代修道院長で、ラドネジのセルギイ（1314 あるいは 1322-1392）とともにロシアを代表するキリスト教正教の聖者である。フェオドーシイの聖者伝『フェオドーシイ伝』は、1074 年の死からそれほど経たない時期（1088 年よりまえ）に、「年代記作者」ネストルによって書かれた。『フェオドーシイ伝』は、ウラジーミル聖公によるキリスト教受容（988）から 100 年ほどで、ルーシでキリスト教の倫理を完全に体現する人物が現われたことを証し立てている。

『フェオドーシイ伝』を貫くキリスト教倫理とは、一言でいえば、揺るぎない意志とあくなき忍耐に支えられた優しい愛である。『フェオドーシイ伝』を見てみよう。フェオドーシイの剃髪までの経緯は次のように描かれている。

フェオドーシイは身体が成長するとともに魂も神への愛に惹かれ、毎日教会に通い、聖書や典礼書を熱心に朗読した。子供たちと遊ぼうとはしなかった。裕福だった両親は、立派な服を着せようとしたが、幼いフェオドーシイはボロを着ることを好んだ。父が他界すると、フェオドーシイは「われらの主が現身（うつしみ）をもって歩いた聖なる場所について聞き、そこに行き、それらの場所を崇めたい」と思いつめ、ついにエルサレムへの巡礼に出かけてしまった。そこで怒り狂ったのが、彼女の母親である。「聖人の母親は激怒と憤怒のために息子の髪をつかみ、地べたを引きずって何度も自分の足で踏みつけた。母の怒りは非常に強かったので、家へ着くとへとへとになるまで息子を打ち据えた。」

しばらく母親のもとで暮らしていたフェオドーシイはやがて、「神への愛に身を焼かれ、神への熱誠に息をつめて、日ごと夜ごとどうやってどこで剃髪を受け、母親から逃れることができるか、深く思いをいたした。」そしてある日、キエフの偉大なるアントーニイのもとに出奔した。フェオドーシイの家出を知ると、母親は「人の死を嘆くときのように胸にこぶしを打ちつけながらひどく泣いた。」ついに息子の居場所を確かめた母親は、アントーニイ師父に息子を返すように迫ったが、フェオドーシイは次のように言った。「おかあさん、毎日私に会いたいと思うのなら、この町に来て女子修道院に入り、剃髪を受けてください。」彼女は肯（がえん）ぜなかったが、フェオドーシイは連日忍耐強く説得した。母親がアントーニイのもとを立ち去ると、フェオドーシイは洞窟に入って、母親が救済されるように、その心が神に従順になるように祈りをささげた。そして、母親はついに折れ、フェオドーシイが修道士になることを赦し、自らも修道女になった。

修道士となったフェオドーシイは、従順でへりくだった心の構えで修行に打ち込んだ。「彼はすべての人に勤勉に仕え、水を運び、森から木を背負い、来る夜も来る夜も神を讃えて眠らなかった。兄弟たちが寝入ると、祝福された人は各自に分配された穀物を取り出し、その分も粉を挽いてもとの場所にもどした。アブやカがたくさんいる時分には、夜彼は洞窟のうえに上り、腰まで衣服を脱いで、毛糸をつむいだり、ダビデの詩篇を歌っ

(6) 邦訳がある。「第 8 話　神に似たるフェオドーシイの聖者伝」三浦清美『キエフ洞窟修道院聖者列伝』松籟社、2021 年、44-142 頁。

(7) 三浦清美「中世ロシア文学図書館（Ⅱ）聖ボリスと聖グレープにまつわる物語」『電気通信大学紀要』23 巻 1 号、2011 年、45-52 頁。

たりしながらじっと座っていた。彼の身体全体がおびただしい数のアブやカによって血まみれになった。アブやカは彼の身体を食べ、その血を飲んだのだ。」

ここには、悪の入りこむ余地がまったくないといってよい。フェオドーシイだけではなく、徳においてこの聖者にはおよばない修道士たち、世俗の者たちもたいていの場合、生得的な悪をもった人物とは描かれていない。しかしながら、修道院とはいえこの世の一部であって、悪を免れることはできないから、そこで起こる悪や都合の悪いことはすべて悪魔や悪霊の仕業にされるのである。「聖なる人は洞窟で、悪霊たちによって引き起こされた多くの災難と幻覚を経験し、傷を負わされることもあったが、これらのことは聖なる『アントーニイ伝』に書かれているとおりである。」

人間の悪を惹起する悪魔の存在がさらに雄弁に語られるのが、『ボリスとグレープについての物語』における「呪われた」スヴャトポルクについての叙述である。ルーシをキリスト教に改宗させたウラジーミル聖公が死んだあと、キエフ大公位をめぐって跡目争いが起こったが、異母弟ボリスとグレープを殺害し、キエフ大公位についたスヴャトポルクは、「呪われた」という形容詞とともに呼ばれ、悪の具現化の典型的人物として描かれている。

「そして、呪われたスヴャトポルクはこの殺人で止まることはなく、狂乱のなかで更なる犯罪に手を伸ばしはじめた。そして、自らの秘められた欲望が実現したことを見ると、スヴャトポルクは自らの殺人が凶悪なものとも考えず、罪の重さも思わず、自分の行なったことに少しも悔やむ様子を見せなかった。そして、このとき彼の心のなかに悪魔が入り込んで、さらに大きな悪行と新たな殺人に手を染めるように唆した。スヴャトポルクは、自らの呪われた魂のなかでこのように言った。『もしもこの殺人で私が思いとどまったならば、二つの運命が私を待ち受けている。私の兄弟たちがこの出来事を知ったら、私より先回りして私が行なったことよりもひどいことをして私に復讐するであろう。もしもそうでなくても、私を追放し、私の父の玉座を奪うだろう。そうなれば、失われた土地を惜しいと思う私の気持ちで、私は憔悴する。罵る者の罵声が私に雨あられと降りかかり、私の公位を誰かほかの者が占め、私の屋敷には生きた人間が一人もいなくなるだろう。なぜなら、私は神に愛された者を殺したのだから。（中略）私の母親の罪は許されることはないだろう。（中略）私の名前は生きる者の書から締め出されるだろう。』（中略）そのようなことを頭のなかで考えながら、悪魔の邪悪な共謀者は至福のグレープに遣いを送り、言った。『すぐに来るがよい。父がそなたを呼んでいる。病が非常に重い。』」[8]

スヴャトポルクは、悪魔に乗っ取られた人物として描き出され、その悪行は神を忘れ、悪魔に身を委ねた結果であると評価されている。キリスト教倫理に支えられた中世ロシア文学は、悪魔や悪霊が跋扈する幻想的な世界ともなりうるのだが、それを差し引いても、中世ロシアは「善は善、悪は悪」というモラルのすみわけがじつにはっきりとした整然たる世界だったといえる。ウラジーミル・ナボコフはこの点を突いて、中世ロシアの文学作品への無関心を公言したが[9]、こういった通念はいまも根強く蔓延っている。

3. 文学への「奸智」の侵入― 15 世紀から 16 世紀にかけての世俗物語

この潮流が何らかのかたちで変化を見せるのは、15 世紀と 16 世紀の境目くらいである。メルクマールとなるのが、天地開闢紀元（ビザンツ暦）7 千年紀、つまり、キリスト生誕紀元（西暦）1492 年である。中世ロシア人は、7 千年紀に世界の終末がおとずれてキリストが再臨することをほとんど疑わなかった。中世ロシア文学研究者で作家のエウゲーニイ・ヴォドラスキンの見解によれば、自らの存在が 7 千年紀という世界の救済計画（オイコノミア）のなかに組み込まれていることを疑わなかった中世ロシア人は、創作というものを信じなかった。すべての執筆活動は、権威が確立されたテクストの反復でなければならなかった。しかし、じりじりとした焦燥感とともに待っていた世界の終わりはついに到来しなかった。それとほぼ時を同じくして（このさい 50 年という差はいかほどのものであろう）、千年帝国であるビザンツが滅び、ロシアは地上で唯一キリ

(8) 三浦「聖ボリスと聖グレープにまつわる物語」48 頁。
(9) ウラジーミル・ナボコフ『ロシア文学講義』（小笠原豊樹訳）TBS ブリタニカ、1982 年、3 頁。

スト教正教を奉ずる国家となった。ここにいたってロシア人は自分自身で世界のさまざまな事象を考える自由がわが身に降りかかってきたと感じるようになった。

翻訳もののセルビア版『アレクサンドリア』[10]、創作である『ドミートリイ・バサルグとその息子ボルゾムィスルについての物語』[11]、『ツァーリの娘の手を求めた老人についての物語』[12]、『ドラクラにかんする物語』[13]など、世俗的な主題をもった文学作品がこの時代に急速に広まったのは、上のような事情による。

『アレクサンドリア』はマケドニアのアレクサンドロス大王についての歴史ロマンスであるが、アレクサンドロス大王の歴史的肖像を描き切ることよりも、誇張をともなった読み物としての面白さに引きずられる傾向があり、血沸き肉躍る冒険譚が教訓的な判断とともに語られている。『バサルグとボルゾムィスルについての物語』は、残酷な統治者が商人バサルグに謎をかけ、解けなければ殺すと迫るが、賢い「まぬけ」、この場合は、7 歳の少年のボルゾムィスルが謎を見事に解いて残酷な統治者に一泡吹かせる。

これに対して、『ツァーリの娘の手を求めた老人についての物語』は、次のような話である。主人公の老人が『マタイによる福音書』7 章 7 節の「敲けよさらば開かれん、求めよさらば与えられん、探せよさらば見出さん」という言葉がほんとうか確かめるため王の城門を敲くと、城門が開き、王への目通りが許される。老人は、王の娘との結婚を願い出るが、王は海から宝石を見つけ出せば結婚を許すと約束する。老人は冒険の果てに宝石を見つけ、王は王女との結婚を認めるが、老人は福音書の言葉が真実であることを確かめたことに満足して立ち去る。

15 世紀後半から 16 世紀にかけてさかんに書かれ読まれた世俗小説は、降ってわいた創作の自由を謳歌し、読み物としての面白さ、つまり知の働きを追求するものだった。その一方で、『アレクサンドリア』の場合のように、ビザンツ帝国の斜陽から影響を受けた 7 千年紀終末論の反映もあった。また、『ドラクラについての物語』では、目的のためには手段を択ばない恐怖政治をおこなったワラキア公ヴラド 3 世ツェペシュ（1431-1476）の残酷さが描かれると同時に、その判決の公平さが強調されている。作者フョードル・クーリツィンはまさにニッコロ・マキアヴェッリの先駆者であった。

『ステファニテスとイクニラテス』もそうした世俗的なテーマをもつ作品の一つなのであるが、筋立ての面白さを追求する全般的な傾向があったことを勘案したとしても、「善行が悪にたいして勝利を謳歌することがほとんどなく、勝利者となるのが正しい者ではなく、力の強い狡猾な者である（Я.С. ルリエ）」この作品は、異様である。いやもはや異形といったほうがよい。それでは、この『ステファニテスイフニラテス』とはどんな作品なのであろうか。

4.『ステファニテスとイクニラテス』とは何か

『ステファニテスとイクニラテス』は、4 世紀インドにおいてサンスクリット語で書かれた動物叙事詩の文集『パンチャタントラ（5 つの本、5 つの教訓）』[14]に起源をもっている。『パンチャタントラ』は、賢者であるブラフマンが王の願いを聞き入れて王に「理性的な振舞い」について話す 5 つの教訓物語からなる。この『パンチャタントラ』が、ペルシア語を媒介としてアラブ世界に伝えられ、11 世紀にアラブの作家アブダラ・イブン・アル・ムカッファはこれをもとに寓話と世俗物語集である『カリーラとディムナ』[15]を創作した。カリー

⑽ *Ванеева Е.И.* «Александрия сербская» // Словарь книжников и книжности Древней Руси. Вторая половина XIV-XVI в. часть 1. А-К Л.,1988, С.21-25.

⑾ «Повесть о Басарге и о сыне его Борзомысле» *(Подготовка текста и комментарии Я.С. Лурье, перевод В.В. Колесова)* // Библиотека литературы Древней Руси (дальше БЛДР). Т.7. СПб., 1999, С.472-483, 577-578.

⑿ *Лурье Я.С.* «Повесть о старце, просившем руки царской дочери» // Словарь книжников и книжности Древней Руси. Вторая половина XIV-XVI в. часть 2. Л-Я Л., 1989, С.281-283; «Повесть о старце, просившем царскую дочь себе в жены *(Подготовка текста, комментарии и перевод Н.С. Демковы.* // БЛДР. Т.9. СПб.,2000.

⒀ «Сказание о Дракуле» *(Подготовка текста и комментарии Я.С. Лурье, перевод О.В. Творогова)* // БЛДР. Т.7. СПб., 1999, С.460-471, 575-577.

⒁ 『インド古代説話集―パンチャタントラ』（松村武雄訳）現代思潮社、1977 年；『パンチャタントラ』（田中於莵弥、上村勝彦訳）大日本絵画、1980 年。そのほか、いくつかの邦訳がある。

ラとディムナは2匹のシャカルで、第1話とアル・ムカッファによってつけ加えられた第2話の主人公たちである。アラビア語版は、のちに西方と東方であらわれた諸版（とりわけギリシア語版）の原本となった。

ビザンツ皇帝アレクシオス1世コムネノス（1048または1056-1118）の侍医、シメオン・シフによって11世紀に創られたギリシア語翻訳は、『ステファニテスとイクニラテス』という表題をもつにいたった。シメオン・シフは、カリーラとディムナという動物の名を、「ステファニテス（栄冠を授けられた者）」と「イクニラテス（道をだとる者、狩猟者）」という普通名詞的な概念によって解釈し、ステファニテスとイクニラテスと翻訳したが、ルリエによれば、この翻訳は誤りである。13世紀から14世紀にかけて、アトス山のスラヴ系修道院のどこかで、南スラヴ語（セルビア語、ブルガリア語）翻訳版の『ステファニテスとイクニラテス』が成立し、15世紀にロシアに浸透したと考えられる。ロシア語諸版は、インド王の予知夢について書かれた7章の途中で中断する、同じ一つの原本である南スラヴ語版テクストにさかのぼる[16]。

ロシア語版の『ステファニテスとイクニラテス』は、7つの物語からなっている。1番目の物語と2番目の物語の2人の主人公、ステファニテスとイクニラテスが、物語集全体の表題となっている。『ステファニテスとイクニラテス』がどういう作品であるか、具体的に見てみよう。

1番目の物語は、動物の王であるライオンとひょんなきっかけでライオンの知遇を得ることになった雄牛の仲を、イクニラテスが奸計をもって引き裂き、ライオンが雄牛を殺すように仕組む話である。ここでは、枠物語が多用されている。多くの場合、イクニラテスがライオンの考えを変えようと誘導するとき、あるいは、奸計を用いることをやめるようにステファニテスがイクニラテスを説得するときに、こういう話がある、あなた（私）の置かれた状況はまさにこの話と同じことだといった風に、物語のなかでまったく別の物語が展開されるのである。1番目の話には、8つの枠物語が組み込まれ、そのうちの1つは、枠物語のなかにもう1つの枠物語をもっている。語りとして巧妙な仕掛けが凝らされていると言ってよい。

2番目の物語（『パンチャタントラ』にはなくムカッファがつけ加えたもの）では、イクニラテスが雄牛を謀殺したことを知ったレオパルドが、ライオンの母親と協力して、王であるライオンにイクニラテスを裁くように説得し、じっさいに裁きがおこなわれる。この裁きにおいて、イクニラテスは巧みな弁舌で追及を切り抜ける。イクニラテスと彼を裁く側の緊迫したやり取りがこの物語の魅力である。

人間の抱える心の闇がテーマだった第1話、第2話と打って変わって、3番目の物語は、つねに友愛のなかにいる友人たちの話である。ハトとネズミはよい友人で、ネズミは猟師の網にかかったハトたちを、網を齧って助ける。それを見ていたカラスは、ネズミと友人になろうとするが、ネズミはカラスを警戒して穴に引きこもる。カラスの必死の説得にネズミはほだされて、カラスとネズミは友達になる。さらにカメとシャモアが友人になる。ある日猟師につかまったシャモアを、ネズミとカラスとカメで助けに行くが、こんどはカメが捕まってしまう。ネズミが一計を案じる。行き倒れのシャモアを獲物として狙っているという演技をカラスが行い、猟師がシャモアに気を取られているうちに、ネズミがカメを縛った紐を食いちぎってカメを助ける。仲の良い友人たちの気の合った連係プレーが功を奏するという結末である。

4番目の物語はふたたび人間の心の暗部に焦点が当てられている。

カラス族とフクロウ族は不倶戴天の敵である。フクロウ族が鳥類の王に選ばれようとしたとき、カラス族が中傷してフクロウ族を引きずりおろしたからである。フクロウ族はカラス族に戦争をしかけ、完膚なきまで打ち負かした。カラス族は一計を案じた。

あるとき、フクロウ族はある瀕死のカラスを助け、なぜ死にかけるような目に遭ったかを訊ねた。そのカラスは、カラス族にフクロウ族との和解を提案したが、そのために裏切り者と決めつけられ、袋叩きにあったのだと述べた。フクロウ族はそのカラスを保護した。だが、このカラスはスパイだった。一羽のフクロウだけがそれに気づき、このカラスを殺すことを進言したが、誰も耳を貸さなかった。

---

⑮ 邦訳がある。イブヌ・ル・ムカッファイ『カリーラとディムナ―アラビアの寓話』（菊池淑子訳）東洋文庫331、1978年。

⑯ *Лурье Я.С.* «Стефанит и Ихнилат» // Словарь книжников и книжности Древней Руси. Вторая половина XIV-XVI в. часть 2.Л-Я Л., 1989, С.417-421.

このカラスはフクロウ族の生活を観察し、傷が癒えたところで逃げ出し、カラスの王にフクロウ族の住み処の弱点を教えた。カラス族はその弱点に火を放ち、フクロウ族をうち滅ぼした。勝利したカラスの王は、そのカラスにフクロウ族の生活ぶりについて訊ねた。そのカラスは答えた。「フクロウ族はみな愚かで生活ぶりもひどいものでした。ただ私を殺すことを進言したあのフクロウを除いては。私には、そのフクロウが一番かしこかったように思えます。」この物語にも、1 つの枠物語がある。

5 番目の物語は、『サルの生き胆』として日本で広まっている昔話と同一である。カメが病気になった。病気を治療するためにはサルの心臓をすりつぶして薬として飲む必要があった。カメの妻は一計を案じた。サルを海のなかの自分の屋敷に誘い、殺して心臓をとろうとしたのである。サルはカメの妻の甘言に乗り招待に応じたが、途中でカメの妻の奸計に気づいた。サルは出がけに自分の心臓を家に置いてきてしまったと言い、カメの妻に岸辺まで戻らせて命拾いした。

6 番目の物語は、人間の愚かさに焦点を合わせている。

ある男が、子供が生まれることを楽しみにして空想を膨らませていたが、妻はある貧しい男の話をして夫をたしなめた。ここにも枠物語がある。その貧しい男は、子供の将来を楽しく思い描いていたが、空想が子供を折檻する自分におよんだときに、油とはちみつの入った壺を壊してしまったのだという。

夫婦はやがて男の子を産んだ。赤ん坊を家に残して留守にしたとき、蛇が赤ん坊を一飲みにしようとした。飼っていたコエゾイタチが蛇に立ち向かい、蛇を食い殺した。そこに夫婦は帰ってきたが、男は血だらけのコエゾイタチを見ると、コエゾイタチが赤ん坊を食い殺したと思いこみ、コエゾイタチを殺してしまった。男は赤ん坊が無事でいるのを見ると、自らの浅慮を悔いた。

7 番目の話は、夢解きの過ちをめぐるものである。ある王が不吉な夢を見て、賢者たちに夢解きを命じた。王にたいして恨みを含む賢者たちは、王の破滅を予言した。彼らは、王が破滅を免れるためには、王妃と子ども、忠臣、騎乗するゾウそのほかを殺してその血で自らの身体を洗い、治療の歌を歌う必要があると進言した。王は進言にしたがうべきか否か迷った。王の懊悩に気づいた王妃は、その忠臣の進言を受けて、別の行者に夢解きをしてもらうように勧めた。別の行者は夢解きをして、これから起きることを予言し、夢がまったく恐れるに足らないことを明らかにした。その行者の夢解きのとおりのことが起こった。王は喜び、王妃と忠臣に褒美を取らせるが、そのとき王妃と忠臣がひそかに思いを寄せ合っていることに気づく。物語はそこで中絶している。

たとえば、『フェオドーシイ伝』と比較すると、『ステファニテスとイクニラテス』が目もくらむような豪華絢爛たる物語世界を展開していることがわかるだろう。

5. 梟雄イクニラテス

どの物語も面白いが特に強い印象を残すのは、やはり人間の心の闇から目をそらさず悪そのものの魅力を追求した第 1 話、第 2 話、第 4 話であろう。中世ロシアの世俗物語について浩瀚な著作[17]をもつ Я.С. ルリエは次のように述べている。「『ステファニテスとイクニラテス』という寓話は、完全に（従来のロシア文学とは–三浦補足）別の様式で構築されている。その登場人物たちは、一義的には解釈されえない。個々の寓話の主題の衝突の解決も一義的ではない。ここでは、善行が悪にたいして勝利を謳歌することがまれで、勝利者となるのは、正しい者ではなく、力の強い狡猾な者である。」この言葉がぴったりあてはまるのは、イクニラテスという梟雄においてであるが、本節では、イクニラテスの暗躍に焦点を絞ってさらに詳しく物語を見てみたい。

王の城門のそばで乞食をしていたステファニテスとイクニラテスは、ある日、気の弱い王のライオンが得体のしれないうなり声におびえているのに気づく。イクニラテスは友人のステファニテスに告白する。「僕たちは力の限り高きにあるものを求めなけりゃいけないんだ。向こう岸にわたらなくちゃいけない。だからこそ、ライオンと話すことで、ライオンのぶち当たっている困難から、何か大切なものを引き出したいと思う。僕は

---

⑰ *Лурье Я.С.* Истоки русской беллетристики: Возникновение жанров сюжетного повествования в древнерусской литературе. Л., 1970.

勇気をもって成し遂げるさ。僕らの仲間でも、始めは大したことのない身分でも、下から這い上がった者がいるだろう。僕が目指すのはそれさ。頭のいい奴はね、真実を歪め、嘘話を創ることができるんだ。」

自らの弁舌で王のそばに仕えることがかなったイクニラテスは王のライオンを慰め、得体の知れないうなり声の正体を突き止めることを王に約束する。イクニラテスに自分が怖がっていることを打ち明けてしまった王は後悔にかられる。「私は何ということをしてしまったものか。君主たる者、かつて軽蔑を受けたり財産を奪い取られたり名誉を失った、貪欲で狡猾な者に、自分の内心の秘密を打ち明けてしまうなど、あってはならないことだ。」このあたりの心理描写は見事である。

イクニラテスは声の正体が雄牛であることを突き止め、雄牛をライオン王に目通りさせると、ライオン王と雄牛はすっかり意気投合してしまう。面白くないイクニラテスは、ライオンと雄牛を争わせ、ライオンに雄牛を殺させるように画策する。イクニラテスはステファニテスにこう述べる。「僕はね、まえのように尊敬される高い地位に上って、その地位にとどまると決めちゃったんだよ。それにはどうすればよいか。雄牛をひと思いに殺してしまうことのほかに、ふさわしい手段がないんだよ。これは僕にとって有益だし、ライオンにとっても有益さ。」

ステファニテスはイクニラテスを懸命に思いとどまらせようとする。ステファニテスとイクニラテスは２人で１つの人格で、ステファニテスは悪人のなかの良心の囁きのような役どころを務めているように見える。

イクニラテスはいくつものたとえ話を繰り広げ、巧みな弁舌でライオンに雄牛が自分に悪意をもっていることを信じ込ませる。ライオンは言う。「おまえの言うことは、常軌を逸しているが一理ある。雄牛が私の敵だったと認めよう。だが、奴は俺様に危害を加えることはできんぞ。奴が食うのは草で肉ではない。略奪者だとわかれば、俺様が食ってやる。」イクニラテスは答える。「そんな考えに誑かされるのはおやめください。その誠実さと友情がほんものだとわからぬうちに、御馳走をしてくれる者に自分の秘密を打ち明けてはいけない、と人はよく言います。あなた様に、シラミに起こったのと同じことが起きませんように。」シラミについての枠物語がつづく。

一方、イクニラテスは雄牛のもとに出かけ、陰鬱で悲しみに暮れた様子で彼の家に入る。雄牛はイクニラテスを歓迎し、どうして顔を見せなかったのか訊ねると、イクニラテスは次のように言う。「自分の居場所をもたず、不公平で信頼に値しない主人に仕えるのはつまらないものだねえ。誰が運命から逃れられると思うんだい。王様に仕え、そのお側にあって無事にいられると思うかい。ご主人様っていうのは、たくさんの男といちゃつく汚らわしい売春婦と同じようなものさ。僕らのあいだには、愛と友情があることを君は知らないのかい。僕、君をライオンのところに連れていっちゃったんだから、君には借りがあるんだよ。だから、君のためを思って君のところにやってきたのさ。忠実で誠意のある知り合いが僕のところに来てライオンがこう言っているというんだ。『俺は雄牛のことを食ってやる。奴は肥え太ってきたからな。』」

いくつかの枠物語を織り込みながら、物語の語りは、ついにライオンが雄牛を食い殺すところまで進んでいく。雄牛殺害のあと、ライオンはすっかり落ち込んでしまう。ライオンの教師で顧問官のレオパルドが、イクニラテスの画策に気づき、ライオンの母親に事の真相を告げる。第２話のはじまりである。

母親はライオンにイクニラテスの悪意に気づかせようとする。ライオンは事の次第を問いただすため、配下の動物たちを招集するが、イクニラテスは他人事のように言う。「私の見るところ、ライオン様は悲嘆と後悔に暮れているようですね。」ライオンの母親が答える。「ライオンが悲しんでいるのは、ほかでもない、今の今までおまえを生かしたままでいたためなんだよ。おまえは狡猾に立ち回ってあの不幸な雄牛を殺してしまったんだからね。」こうして、イクニラテスの裁判がはじまった。

ライオンの母親は、イクニラテスを糾弾して言った。「この狡猾で不誠実な者を見るがよい。この者は無法を行い、大いなる犯罪を犯した挙句、真実を歪め、自らの狡猾な言葉で私たちを誑かそうとしている。」イクニラテスは答える。「女が男の仕事に口を出すのはよくないことです。女が支配する家とその男は不幸です。聞かれもしないのに王に答える者は分別がありません。悪をなす者は、誰にたいしても友情をもつことがなく、将来の悪から身を守ることができません。」 イクニラテスはさまざまな者たちから糾弾されるが、そのたびに巧みな弁舌でしのぎ切る。しかし、次第にイクニラテスへの包囲は狭まり、牢獄に入れられては尋問に呼び出

されるということが繰り返される。そのあいだに、友の窮状に絶望したステファニテスは毒をあおって自殺してしまう。イクニラテスは追及をしのぎ切ったかに見えたが、母親の懇望に折れたライオンがイクニラテスの処刑を命じた。

梟雄イクニラテスにおいて、悪の魅力が縦横に描き出されているように見える。

6.『ステファニテスとイクニラテス』と溶解するビザンツ世界

11 世紀にギリシア語訳が、13-14 世紀に南スラヴ語が、15 世紀に中世ロシア語訳が現われたわけであるが、なぜインド起源の東方の物語に関心が集まったのかを考えるにあたっては、東方キリスト教正教世界が直面した歴史的状況を紐解かなくてはならない。

『ステファニテスとイクニラテス』が翻訳されたのは、アレクシオス 1 世コムネノスの時代であったが、アレクシオス 1 世はロベール・ギスカールのビザンツ帝国領への侵入を阻止するために、海軍力のあるヴェネツィアと結び、ヴェネツィアに関税などで諸特権を与えた。それはやがて東地中海をめぐるコンスタンティノープルとヴェネツィアの覇権争いに発展する。また、アレクシオス 1 世はウルバヌス 2 世（1042-1099）に主導された第 1 回十字軍が領内を通過することを認めたが、十字軍はビザンツ帝国の領内で略奪を働くことになる[18]。やがて第 4 回十字軍へとつながる帝国の暗雲が、どこからともなく集まりはじめていた。

アレクシオス 1 世の時代にまかれた種は、やがて第 4 回十字軍によるコンスタンティノープルの破滅へとつながっていく。第 4 回十字軍による惨禍を目撃した、おそらくは無名のノヴゴロド人による記録が残っている[19]。それによれば、アンゲロス朝の諸帝の乱脈な権力への執着のあり方が詳細に報告され、コンスタンティノープルの破滅の主たる原因になったことが明らかにされているが、コンスタンティノープルに最後の一撃を加えたのは、十字軍をコンスタンティノープル襲撃に誘導したヴェネツィア総督エンリコ・ダンドロ（1107-1205）の奸智であったことも忘れられてはいない[20]。第 4 回十字軍でビザンツ帝国は事実上崩壊した。

14 世紀前半、ビザンツ帝国におけるアンドロニコス 2 世パレオロゴスとアンドロニコス 3 世パレオロゴスの内紛に乗じて、セルビア王ステファン・ウロシュ 4 世ドゥシャン（1308-1355）がビザンツ帝国からアルバニアとマケドニアを奪い、1345 年、セルビア主教を総主教に格上げし、翌年、総主教により「セルビア人とローマ人の皇帝」として戴冠する。ステファン・ドゥシャンは父ステファン・デチャンスキ王を殺害して王位に即いている[21]。ビザンツ共同体 Byzantine commonwealth が崩壊に瀕するなかで、おのれの野心でビザンツ帝国の権威にとって代わろうとする人物が現われたのである。ステファン・ドゥシャンのあとは、オスマン帝国がムラト 1 世（1360 頃 -1389）のもとでバルカン半島征服を着々と進め、コソボの戦い（1389）で、セルビア侯ラザル、ボスニア王スチェパン・トヴルトコ 1 世、ワラキア大公ミルチャ 1 世などからなるバルカン諸侯軍を打ち破る。やがてバルカン半島のキリスト教正教諸勢力は、ムスリムの支配下に入り、南スラヴ諸国は終末論に傾斜していく[22]。

ビザンツ帝国を軸とするキリスト教正教秩序が溶解状態に陥り、自らの野心によってビザンツの権威に代わろうとするステファン・ドゥシャンのような人物が現われたとき、『ステファニテスとイクニラテス』の南スラヴ語版が誕生したのである。一方、ロシアではどうだったであろうか。ロシアの 15 世紀は、モスクワのもとでの権力の集中が実現されると同時に、ビザンツ暦 7 千年紀の世界の終末が待たれていた時代である。折しもビザンツ帝国が滅亡し、ロシアは地上で唯一のキリスト教正教国家となっていた。

7.『ステファニテスとイクニラテス』と中央集権化するロシア

中央集権化のはじまりは、12 世紀後半にさかのぼる。やがてロシアとなる北東ルーシでは、神の代理人で

⒅ 井上浩一、栗生沢猛夫『世界の歴史　ビザンツとスラヴ』中央公論社、1998 年、156-159 頁。
⒆ 三浦清美「1204 年の十字軍によるツァリグラード征服の物語」Slavistika XXXII、2017 年。
⒇ クラリ『コンスタンティノープル遠征記』筑摩書房、1995 年、179-189 頁
㉑ 井上、栗生沢『ビザンツとスラヴ』329-330 頁。
㉒ 「コソボの戦い」『世界大百科事典 Ver.1.0』日立デジタル平凡社。

ある権力者（アウトクラトール＝サモジュルジェツ）による統治という中央集権化の方向に進んでいくが、この体制においては、世俗権力者（ウラジーミル大公）と宗教的権威（全ルーシ府主教）との協働が不可欠だった。

ウラジーミル・モノマフ（1053-1125）の死後、ルーシの統一は完全に失われ、戦国時代の様相を呈していたが、北東ルーシにアンドレイ・ボゴリュプスキイ（1111-1174）があらわれて、クリャジマ河畔のウラジーミルに壮麗な都を造営し、ヴォルガ・ブルガール族を討ち、中央集権的な国家を建設することを目指した。アンドレイは、フェオドールをロストフ主教にすえてコンスタンティノープル総主教座からの独立を目指すが、しかしながら、トゥーロフのキリルはこれを奸智と捉えて非難した[23]。

アンドレイ・ボゴリュプスキイは、大公のもとへの権力の集中を嫌った配下の貴族によって暗殺された。死後、『アンドレイ・ボゴリュプスキイ暗殺の物語』が書かれたが、この作品のなかで作者は、6 世紀ビザンツの文筆家アガペトゥスがユスティニアヌス大帝に捧げた言葉、「ツァーリは地上の本質において人間に似ているが、力としての位階は神のようである」を引用しながら、アンドレイの中央集権化の試みを正当化している[24]。

14 世紀初頭、勃興したトヴェーリ公ミハイル（1271-1318）は、府主教座を傀儡化して中央集権的支配体制を確立することを目指したが、キプチャク・ハーン国のウズベクと結んだモスクワ公ユーリイ（1281-1325）に謀殺された。その後、モスクワ公イワン・カリター（1288-1340）は、全ルーシ府主教ピョートル（?-1326）、テオグノストス（?-1353）との協働によってモスクワの支配権を確立させた。19 世紀の歴史家クリュチェフスキイは、モスクワの勃興を、「道徳的に見栄えのしない闘争で成功を収めた」[25]と評価している[26]。

14 世紀後半、モスクワ大公国は、北西で勃興したリトアニア大公国と対決する。ビザンツを懐柔して独自の府主教を立て、モスクワに対抗するリトアニア大公アルギルダス（1296-1377）の奸智にたいして、モスクワ府主教アレクシイ（?-1378）も、アルギルダスの影響下にあるトヴェーリ公ミハイル 2 世（1333-1399）にだまし討ちを食らわせるという奸智で対抗する[27]。クリコヴォの戦い（1380）を経てルーシ諸公への命令権を確立したモスクワ大公国は、国土統一の最終段階で、ルーシの中央集権化に終始抗ってきたノヴゴロド貴族共和国を併合するが、ノヴゴロド包囲網の構築は、モスクワの奸智によるものであった。

その最終局面でもモスクワの奸智はいかんなく発揮された。モスクワ大公イワン 3 世（1440-1505）は、ノヴゴロドからモスクワに送られてきた書簡のなかに、モスクワ大公を「主人（ゴスポディン）」ではなく「君主（ゴスーダリ）」と呼びかけたものを目ざとく認め、ノヴゴロドの全街区への代官の派遣を要求した。全ノヴゴロドが驚愕し、パニック状態に陥り、モスクワ大公は「主人（ゴスポディン）」であることを確認しようとしたが、イワン 3 世はノヴゴロドを、ひとたび君主権を引き渡しながら、あとになって自分を嘘つき呼ばわりする反逆者であると決めつけて宣戦を布告し、ノヴゴロドは最終的にモスクワ大公国に併合された[28]。

一言でいえば、15 世紀におけるモスクワ大公国による中央集権化は、節目節目で奸智を駆使した権力闘争のプロセスであった。先にあげた『ドラクラについての物語』のように、そのような政治的奸智のあり方を肯定する思潮もあった。『ステファニテスとイクニラテス』のテーマは、きわめてアクチュアルなものだったのである。この物語が爆発的に読まれたのは、偽ドミートリイ 1 世、偽ドミートリイ 2 世が暗躍した 17 世紀、スムータの時代であるが、16 世紀においてすでにかなり読まれていた。その痕跡が残っている。

16 世紀後半、王ステファン・バトーリイ（1533-1586）に率いられたポーランド・リトアニアの軍勢がロシ

---

(23) *Кирилл Туровский* «Притча о человеческой душе и теле» *(Подготовка текста, комментарии и перевод В.В. Колесова)*. // БЛДР. Т.4. СПб., 1997, С.142-157, 604-607.

(24) 三浦清美「中世ロシア文学図書館（Ⅲ）アンドレイ・ボゴリュプスキイ公殺害の物語」『電気通信大学紀要』24 巻、2011 年、97 頁。

(25) クリュチェフスキイ『ロシア史講話（Ⅱ）』恒文社、1981 年、65 頁。

(26) 三浦清美『ロシアの源流』講談社選書メチエ、2003 年、39-112 頁

(27) 三浦『ロシアの源流』113-180 頁。

(28) 松木栄三『ロシア中世都市の政治世界—都市国家ノヴゴロドの群像』彩流社、2002 年、360-368 頁。

アに攻めこみ、ルーシ北西の町プスコフを包囲した。プスコフは、1581 年 8 月から 5 か月にわたる包囲戦を戦い抜くが、包囲戦が終わった直後にプスコフのイコン画家ワシーリイによって『ステファン・バトーリイによるプスコフ来襲の物語』が書かれている。ステファン・バトーリイへの敵意を露わにした、このエモーショナルな作品は、ロシアに攻めこんだステファン・バトーリイの傲慢さを、『ステファニテスとイクニラテス』の一節を引用して次のように描いている。

「余（ステファン・バトーリイ–三浦注）は過去の栄光に加えて、新たな企てをはじめている。余は高みに立っているが、いっそう高きに上り、さらなる高みに上ることにしよう。それは、言葉巧みな者が次のように教えているとおりである。『高い山に立つならば、さらに高く大きな山を探し、それを征服したくなるものだ。あたかもウサギを捕まえ、ラクダを見つけたライオンが、ウサギを捨ててライオンを追うかのごとくに。』（イクニラテスの言葉–三浦注）」[29]

プスコフ包囲戦の時代は、イワン雷帝（1530-1584）の晩年にあたり、ロシアではリューリク朝のいわば万世一系の君主による統治がおこなわれていた。イコン画家ワシーリイは、イワン雷帝を神に選ばれた正当な君主と称揚している。それに対して、ポーランドはシュラフタ民主政の全盛期であった。ポーランドでは、1572 年にヤギエウォ朝が断絶し、2 年間の空位時代を経てシュラフタの選挙でヘンリク・ヴァレジ（1551-1589）が国王に選ばれたのであるが、ヘンリクはフランス王シャルル 9 世（1550-1574）の死去を受けてフランス国王アンリ 3 世となるために、ポーランドを後にした。そのあと、ハプスブルグ家のマクシミリアン 2 世（1527-1576）とトランスシルヴァニア公ステファン・バトーリイが選挙で争って、ステファン・バトーリイが国王となった。ステファン・バトーリイは、しかしながら、ポーランド語を話すことができなかったという。

700 年の歴史をもつリューリク朝がつづいていたロシア側から見れば、トランスシルヴァニア公という出自にもかかわらず、ポーランド国王、リトアニア大公の位（「高い山」（イクニラテス））を目指したステファン・バトーリイの君主選出のプロセスは、でたらめで奸智の発動そのものに見えたことだろう。イコン画家ワシーリイが『ステファニテスとイクニラテス』を引用して、ステファン・バトーリイの傲慢を叩いたのは、ポーランドのシュラフタ・デモクラシーを批判する意味合いも含んでいたはずである。

権力の集中がおこなわれると同時に、7 千年紀の世界の終末も近づいていたが、この預言の実現にたいして、『ステファニテスとイクニラテス』は同時代人とは全く違う態度をとっている。第 7 話は、予言というものがそもそもたわいもない、あてにならないものであることをその筋立てによって示しているからである。7 千年紀世界終末は、ロシア正教会の公式見解であり、時代の熱気であったが、『ステファニテスとイクニラテス』はこれを真っ向から否定してかかったのだ。これは特筆に値することである。そこには、現世しか信じない、冷徹な、というよりも、冷酷なリアリズムがある。権力一極集中時代の権力闘争を、この冷酷なリアリズムによって勝ち抜くという、向こう見ずでしたたかな意志が、この作品にはたしかにある。それこそが『ステファニテスとイクニラテス』の本質だ。

---

(29) 三浦清美「中世ロシア文学図書館（Ⅵ）ステファン・バトーリイのプスコフ襲来についての物語」『電気通信大学紀要』27 巻、2014 年、68 頁。